

# 図書館司書課程における新図書館を活用した アクティブ・ラーニング授業の展開

設 樂 馨

## 1. はじめに

### 1. 1. 目的

2017年秋に新図書館が開館した。図書館には、吹き抜けになった開架閲覧スペース「知恵の蔵」と、アクティブ・ラーニングを促進するラーニングコモンズを備えた「交流の床」、その2種類の空間に渡ってキャンパス全体をつなぐ、イベント活用スペースを擁した「京女坂」が配置された。「図書館利用案内」<sup>1)</sup>によれば、「利用者が目的に応じて様々な学習環境を選ぶことができる滞在型図書館」である。

そして、本学におけるアクティブ・ラーニングの普及は、本誌『京都女子大学図書館情報学研究紀要』第3号および、第4号に「アクティブラーニング」「アクティブ・ラーニング」を冠する論考<sup>2)</sup>を含み、平成29年度よりシラバス作成に求められる「京女AL（アクティブ・ラーニング）区分」<sup>3)</sup>より、授業の常態として取り入れられつつあることがわかる。環境が整備され、ALの教育手法が浸透する現状にあって、学生は新たな環境をどのように活用するのだろうか。図書館司書課程の授業設計と展開を詳述し、「滞在型図書館」の端緒を考察する。

### 1. 2. 新図書館における授業活用空間

まず、本稿でアクティブ・ラーニングを展開するのに有用となった新図書館の空間について概観しておく。

図書館「交流の床」の地下1階にメディアコモンズ、1階にアクティブラーニングコモンズがある。そのほか、本稿の授業では使用しなかったが、1階から3階にかけてグループ学習室9室、4階に個人学習スペース9室、2階に飲食可能なカジュアルスタディスペースがある。

メディアコモンズにメディアルーム2室がある。メディアルームにはプロジェクターやDVDデッキが設置され、可動式の椅子と壁面のホワイトボードがあり、少人数学習向きの部屋である（2. 3. 2. で授業事例を紹介する）。

アクティブラーニングコモンズには、グループディスカッション向きの机椅子、ホワイトボードが設置されていて、壁面（地階への吹き抜け側）にノートパソコン13台があり、パソコンを使った作業を、複数人で意見を出し合いながら進めるのにも適している（2. 4. 2. で授業事例を紹介する）。

## 2. 授業展開

### 2. 1. 図書館司書課程における本授業の位置づけ

本稿における授業は「図書館情報資源特論」である。当該科目は選択科目で、必修科目「図書館情報資源概論」を踏まえて発展的に、図書館における情報資源（中心としたのは図書）の活用を目的とした資料特性について理解する。

受講生には、現実の図書館員が選書や組織化をする際に資料特性に応じた問題解決が求められること、そのため、知識習得だけでは不十分であることを説明した。そのうえで、この授業では図書館情報資源を作成し、その作成過程にグループワークを取り入れることを伝えた。グループワークを重視するのは、発生する問題を個人でなく協同において解決することが現実的であるとし、グループワークにおいて公平性が重要であることを強調した。

アクティブ・ラーニングでは主体的な問題解決・協働的なグループワークが期待される<sup>4)</sup>。そのなかで今回、「公平性」を強調したのは、グループワークで課題提出の締め切りを設けると、締め切り間際になって特定の個人に負担が集中したり、授業時間外の負担が不平等であったりして、メンバーの関係性が悪化することがあるためである。これを、グループの課題と捉えず、授業そのものへの不満になることがある。そのため、グループ内の報告・連絡・相談によって、公平な分担となるよう、繰り返し注意を与え、教員からも度々進捗と分担を尋ねるように配慮した。

## 2. 2. アイスブレイク

受講生は計11名<sup>5)</sup>で、2回生8名、3回生2名、4回生1名と学年が混在し、所属学部・学科<sup>6)</sup>も多様であった。第6講時に開講していて、当該授業前にも図書館司書課程科目を受講していること、遅い時刻の帰宅になることを厭わないことなど、受講生の特徴として努力家であることが予想された。

努力をしても、緊張状態では良い成果が得られにくい。初回授業はアイスブレイクとなる自己紹介を行った。「自己紹介カード」と

して、下記のような質問事項を列挙したミニペーパーを配布した。この質問に答える形で自己紹介をしても良いが、答えたくない質問は紹介しなくて良いし、質問以外のことを述べても良いことを申し添えた。

### 自己紹介カードの質問事項

- ・ここまでの通学時間は？
- ・きょうのランチ、何食べた？
- ・何月生まれ・好きな季節はある？ いっつ？
- ・犬派？ ねこ派？ それ以外？
- ・今まででいちばんステキだなと思った名前は？
- ・わたし最高に輝いていた(る)！ は今？ 過去？ 未来？
- ・自分史上、最大に恥ずかしい年齢は？
- ・自分を《お菓子・動物…》にたとえると何？
- ・おススメの《本・音楽・料理・お菓子・趣味・スポット・スポーツ…》何かありますか？
- ・今日は何かお気に入りのものは身に付けていますか？ それは何ですか？
- ・どうして《司書課程・この授業・この時間》取るの？

先に述べたように、緊張状態を解くため、つまり、受講生同士がお互い打ち解けて話し合える関係性になることが目的であるため、共通項が見つかりやすい質問を設定した。カードにはイラストを挿入し、文体も口語的にして堅苦しさを取り除くようにしている。

しかし、教室が受講者数に比してかなり大きく、固定の机椅子で姿勢が前向きに限定されるため、受講生全体に聞こえるよう、そし

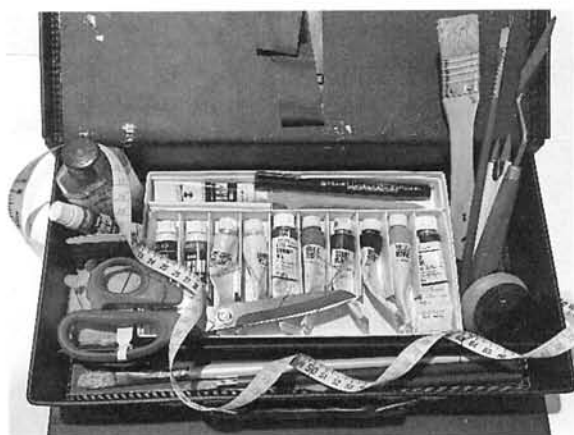
て顔を向けて話すためには、一人ずつ教壇に立ってもらわなければならない。いわゆる「発表」の形式は、一人ずつ自己アピールをするグループ面接のように、非常に堅苦しい自己紹介となった。

## 2. 3. ペアワーク

### 2. 3. 1. グループワークの導入として

クラスが硬直したままグループを形成することは難しい。まずは席の近い者同士でペアワークに取り組み、ペアワークを糸口にグループワークへ移行することにした。

導入という位置づけから、図書館情報資源の中でも文量が少なく、製作時間のかからないものとして、絵本『ミッケ！：いつまでもあそべるかくれんぼ絵本』<sup>7)</sup>の1ページを製作させた。



作品1（絵本に使用した画像）

作品1は、学生が自宅にある画材を持ち寄って組み合わせ、スマートフォンで撮影したものである。これに文章を添えて絵本のように仕立てる。

### 挿入文章

もういいかい？

えんぴつがない！ どこかな？

さかさまの「1」がかくれているね

白い絵の具もどこかにあるぞ

ネコのマークもかくれているね！ ほらあそこあれあれ？ 黒い糸まきはどこだっけ  
さいごに赤い糸と黒い糸、みつけれられるかな？

みいつけた！

文章は、絵本を参考に最初と最後の一文「もういいかい？／みいつけた！」<sup>8)</sup>を統一させた。各ペアで計6作品を完成させ、すべてのページを印刷して受講生全員で校正をした。

### 2. 3. 2. メディアルームの活用

校正は、メディアルームを使用した。図書館員に依頼してプロジェクターを活用し、受講生の手元に印刷したものを持たせ、壁面にはパソコンで作成したWordファイル形式の画像を投影した。作成したペア以外から、「子供向けには難しい漢字が多い」「漢字にはフリガナが必要だ」「質問文の意図がわかりにくい」「答えが合わない」などの意見が出され、作成したペアが中心になって修正案を考え、最終的に受講生全体で練り上げた修正案を、教員がパソコン上で修正し、修正箇所を全員で確認する、というように授業が進行した。

メディアルームは、10名前後が投影されたプロジェクターの画像をはっきり視認できる、広すぎない面積である。そのため、受講生全員が微細な修正案（例えば、ほんの1字2字程度の字種や2語3語レベルの入れ替え）を即時、共有できた。通常、使用していた固定式の机椅子のある教室よりかなり狭く、物理的な距離間が縮まったこと、可動式の椅子で

あったこと、そういったことから発言者に対して振り向いたり、ペアワークをした相手と向き合ったりと、自由に姿勢を変え、活発な意見交換になった。

## 2. 4. グループワーク

### 2. 4. 1. 小冊子の作成

受講生には、ペアワークとクラス全体での校正を経て、利用者に見せる(魅せる)情報資源の性質が理解された。また、他者との協働が求められる、という授業観点も、ふりかえりシートによって確認した。次の課題は、3ペアが合体してグループになり、複数ページで構成される冊子体を編集することとした。

まず、冊子体のコンテンツとなるアイデアを募ったところ、新図書館を紹介するものと、それ以外の子どもに人気のある科学情報を紹介するものとに絞られた。そこで、どちらに興味・関心があるかでグループ分けをした結果、必ずしもペアワーク時のペアが合体するのでなく、目的を共有する受講生でのグループ構成となった。

次に、グループワークの目的が明確になるよう、受講生全員に次の事項を話し合って完成までの計画を設計させた。

#### グループワークの計画

- ・冊子の仮タイトル
- ・冊子の目的(作成するメリットや企画の特長)
- ・冊子を利用する対象者
- ・内容
- ・ページ数や大きさ、大まかなレイアウト
- ・実施態勢(時間配分と分担)
- ・予算(100部印刷する場合の経費)
- ・用具・備品(編集に必要なツール)

計画書は2グループなので、2種類のみであるが、グループ内で目的をはっきり認識してもらうため、一人1枚、手書きで提出を求めた。一つは「新図書館パンフレット」、もう一つは「錯視の世界」という冊子を作成することになった。

なお、この計画書は受講生のみならず、教員にとっても大きなメリットがある。計画書により、両グループの作業進捗の度を把握できる。このため、授業回数が進むなかでの作業進捗、計画から変更したこと、変更により期日に間に合うのかどうか、といった確認ができ、時機に即した指導を可能にする。

毎回の授業で、何を目標にどのくらい進んだのか、進捗とメンバーの分担を尋ね、仕上げを見越して第13回目を原稿締切に設定した。仕上がった原稿を一つずつ、内容とページ数や大きさ、表紙の順に以下に示す。

#### 「新図書館パンフレット」

- ・開館日程・時間、入退館、作成者、作成日(作品2参照)
- ・フロアマップ(pp.2-3)
- ・蔵書検索の利用法(pp.4-5)
- ・スペース紹介(pp.6-7、作品3参照)
- ・日本十進分類法(裏表紙)
- ・8ページ、A4サイズ、カラー

作品2および作品3を見るとわかるように、「新図書館パンフレット」では館内の写真を使用している。これは、館内表示で「撮影禁止」としている図書館に対し、受講生が交渉して、図書館員の立ち会いのもとで撮影を許可され、撮影した画像から選別して掲載した。同様に、作品3に添えられたスペース紹介の文章は、受講生が図書館員に依頼してアポイ



作品2 (「新図書館パンフレット」表紙)



作品3 (「新図書館パンフレット」スペース紹介)

ントを取ってインタビューした情報を元にして

作品2の右下および作品3の右中央と右下には、京都女子学園マスコットキャラクター「ふじのちゃん」を掲載している。これは、使用を申し出た受講生に対し、教員が仲介して経営企画・広報室の許可を得た。(配置や大きさなどの編集は受講生である。)

「錯視の世界」

- ・作成日、作成者、監修者 (作品4参照)
- ・まえがき、目次
- ・5種類の錯視紹介 (pp.2-11)
- ・錯視の仕組み (p.12)
- ・本の紹介 (p.13-14、作品5参照)
- ・参考文献一覧、奥付
- ・16ページ、A4サイズ、カラー



作品4 (「錯視の世界」表紙)

次に、作品4は表紙に「京都女子大学 錯視グループ 作成」とあり、裏表紙の見返し部分に記載した奥付には「著者 2017年度後期 図書館情報資源特論 受講者 錯視グループ」に続いて、グループ構成員5名全員

の学籍番号と氏名を明示している。奥付では、責任表示のほか、タイトルとともに「2018年1月11日初版発行」、「発行者 設楽馨」の記載もあり、一般的な図書を参考にして完成させた。



作品5 (「錯視の世界」本の紹介)

クアートとして楽しめ、錯視芸術や錯覚実験、パズルを掲載するような子どもに親しみやすいものまで取り揃えている。紹介文の冒頭に「みんなも学校や町の図書館でぜひさがしてみね」とあり、図書館活用へ誘導する仕掛けが加えられている。この「本の紹介」では、表紙と、興味深い紹介文のみである。しかし、ここで本に関心を持ったあと、次のページをめくると「参考文献」として詳しい書誌情報がまとめられている。読者の理解に沿った情報の深化が施されている。

## 2. 4. 2. アクティブラーニングコモنزの活用

編集作業は、アクティブラーニングコモنزを使用した。受講生には、学内で最も作業がしやすいところで活動すること、その場所は教員に報告すること、と指示した。つまり、教員が図書館を活動場所に指定したわけではない。しかし、コンテンツの資料や素材が図書館にあり、パソコンを使用して原稿を作成するには必要な用具がそろっているため、自ずと学生が判断し、選択した。

アクティブラーニングコモنزのパソコンは、学生のIDとパスワードでログインして使用する。液晶画面が大きめのノート型パソコンは、壁際（一部、吹き抜けになっているため圧迫感は低減する）に並び、パソコン1台につき椅子が一つ置かれている。本授業では、一つのパソコンの画面を複数人で見られるよう、椅子を持ってきて囲み、中央の一人が入力作業をしていた。ほとんどの学生がUSBメモリを携帯し、編集途中の原稿はUSBメモリに保存し、提出もUSBメモリを挿入して、あるいは、メール添付で教員に送信した。

なお、アクティブラーニングコモنزを利用する日時として、通常の授業時のほか、補講を入れた土曜日第1、2講時や授業時間外には、ほかの授業と重なって遅れて参加するメンバーや、体調不良者がいることがあった。こうしたとき、各自が携帯するスマートフォン等でSNSを利用し、上手に連携を取り、作業への参加を促していた。

## 3. 学生の評価

### 3. 1. 評価用紙

小冊子の提出後、クラス全体で校正をして最終の振り返りを実施した。下記の内容を含む評価用紙を用いた。

#### 評価用紙

- ・他グループの評価（完成度、図書館情報資源としての価値<sup>9)</sup>、アピールポイントを聞いた感想、改良点やアドバイス、総合評価)
- ・自グループの評価（満足度、進め方や問題解決能力の向上<sup>10)</sup>、アピールポイント、今後にかける経験、総合評価)
- ・作品を学内関連部署へ送付すると仮定し

た場合の、送付状の一文<sup>11)</sup>

### 3. 2. アクティブ・ラーニングで習得したこと

上記評価用紙の回答から、学生がアクティブ・ラーニング、特に今回のグループワークで習得できたことを抜粋して分析する。

- 1) 初対面の人としっかり話して、良いグループワークができたと思います。
- 2) グループワークでは積極的に意見を出すことを心がけた。
- 3) 全員で話し合いながら協力して進めることができた。
- 4) 時間配分がうまくいかなかったり、グループメンバー全員で集まってパンフレット作成に取り組むことができなかったの、情報の共有を欠かさないようにする。
- 5) 作業中、自分のやるべき事が分からない場合は自分から探しに行く、周囲の人に聞くなど積極的に動いていかなければならないと感じた。時間を決めて作業に取り組むことはできたので今後も意識していきたい。

グループワークにおける進め方を、5段階で自己評価させた結果、平均4点と高得点であった。

1)「良いグループワークができた」3)「協力して進めることができた」5)「時間を決めて作業に取り組むことはできた」という記述は、この経験で自信を得たのだと考えられる。なお、「新図書館パンフレット」のグループは、作成にとりかかったばかりのころ、出来上がっても授業内のみの使用として、図

書館に置いたり授業外で見せたりしたくない、という要望が強かった。完成後、もう一度、図書館に置いてもらってはどうかと尋ねると、図書館が置いて良いというなら、と控え目に完成品に自信を持ったことをうかがえる反応を得た。

次に、4)「時間配分がうまくいかなかった」「全員で(中略)取り組むことができなかった」ことを反省し、「情報の共有を欠かさないようにする」というのは、自己の課題が明確になっているのであり、失敗はあったが得るものもあったと言える。

5)「積極的に動いていかなければならない」には、主体的に行動することの重要性が見て取れる。

### 3. 3. 新図書館に対して

次に、新図書館パンフレットを作ってみた感想や送付状の一文、授業で実際に新図書館を使った後に完成したパンフレットを目にして感じた部分を中心に抜粋して分析する。

- 1) 従来の図書館にはなかった新しい施設を設置しました。学生同士が積極的に意見を交換するためのアクティブラーニングコモンズや、パーソナルコンピュータやプロジェクターといった機器を用いたメディアコモンズやメディアルームなどのスペースがあります。
- 2) 設置機材やスペースを最大限有効に利用できるように、オススメの使い方も載せました。
- 3)「利用を促すような紹介」、「実際に利用した感想が反映されている」、「読み手が必要としている正確な情報」など、このパンフレットを手にとった人が実際に

- 図書館を利用するときに必要な情報を意識して作製したことが伝わってきました。
- 4) スペース紹介の文がわかりやすく細かな席数の情報も載っていたので、それぞれの部屋の使用用途が明確になり利用してみたい人が増えるのではないのでしょうか。
  - 5) ルールなども載ってあって良いと思った。

冊子への満足度を、5段階で自己評価させた結果、全員4点であった。他グループの作品の完成度を、5段階で採点させた結果は、平均4.2点となって、やや上昇する。全体的に、今回の受講生は自分に厳しい、あるいは、誠実であろうとする態度が強いのかもれない。

例えば、記述では1)「新しい施設」2)「設置機材やスペース」4)「スペース紹介の文がわかりやすく細かな席数の情報も載っていた」というように、新しくて利用者がまだ知らない情報を正確に把握するように努める態度が見て取れる。

また、2)「オススメの使い方」3)「実際に図書館を利用するときに必要な情報」4)「利用してみたい人が増える」には、作成の意図を汲んで、司書であれば図書館利用を促すために努力しているのだ、という共感が強くあり、作成者も読者（「新図書館パンフレット」に関わっていないグループのメンバー）も、新図書館に期待し、たくさん利用してほしいという要望を強く持っていることがうかがわれる。

5)「ルールなども載ってあってよい」は、図書館利用に際して不明なことがあると使いにくい、ルールは守って使いたいという規範

意識の高さが見て取れる。余談だが、土曜日の補講時は原稿提出の最終期限が迫っていて、授業時間後も昼食時間を過ぎて多くの受講生が編集作業を続けていた。持参した菓子があったので配布すると、「ありがとうございます。でもここは飲食禁止なんです。」とすぐに鞆にしまっていたことが印象深い。受講生の近くを通った図書館利用学生も、私が配布した菓子を目にして心配そうに、まるで「ここでは飲食禁止と注意すべきだろうか」と言いたげに数回、振り返り、受講生が菓子を鞆にしまったところで去っていった。

#### 4. 滞在型図書館とは

改めて、学生の図書館利用についてまとめ直すと、パソコンを使いながら、図書館情報資源を活用した作業をするには、アクティブラーニングcommonsを活用している。2. 4. 2. の補足となるが、「錯視の世界」担当グループは、コンテンツの打合せを終えてスマートフォンを使って蔵書検索をした後、図書館へ移動している。「新図書館パンフレット」は、「図書館利用案内」を読んで打合せをしてから、不明な点や冊子で取り上げられることを模索しに図書館へ移動し、アクティブラーニングcommonsに着席した。

メディアルームは、プロジェクターなどを使いながらの利用に適している。ただし、事前申し込みや学生のみ利用申し込みが制限され、機材が整っている分、学生に開放されているエリアとは使用方法が異なる。

これまでにないスペースが設けられたことで、学生にとっては、使いたい・使ってみようという気持ち強い。しかし、何ができて何をしたいいけないのか、例えば、飲食やおしゃべりが可能なスペース、スペースによって使用



許可を求めなければならないところがある、といったルールをしっかりと把握し、把握したうえで使いたいのだ、という規範意識の強さもうかがえた。

滞在は歓迎だが、どのように滞在すれば図書館と良い関係が構築できるのか。図書館司書課程という特性もあろうが、学生は新図書館が大変魅力的なものだと感じている。そうした学生たちの、秋に開館して間もない2018年1月現在、図書館活用の第一歩を踏み出したばかりといった諸相を、図書館司書課程の授業を通じて描写した。徐々に新図書館に親しみ、使いこなしていく過程にも注目していきたい。

## 謝 辞

「交流の床」における授業利用を支援してくださった図書館、中でも受講生のインタビューや写真撮影では図書館員各位にご指導賜りました。経営企画・広報室には、「新図書館パンフレット」にて京都女子学園マスコットキャラクター「ふじのちゃん」掲載を許可くださいました。以上、各位に対し、深く感謝申し上げます。

## 引用文献・注

- 1) 2017年9月より配布されている、京都女子大学図書館作成の利用案内である。
- 2) 桂まに子「図書館司書課程におけるアクティブ・ラーニング授業の設計」『京都女子大学図書館情報学研究紀要』第4号、2017、pp.1-10  
坂下直子「児童サービス論におけるアクティブ・ラーニング：グループワーク参加型のループリックによるパフォーマンス評価」『京都女子大学図書館情報学研究紀要』第1号、2016、pp.135-146
- 3) ①振り返り（ミニテスト・レポート等フィードバックを伴う）  
②対話型授業（質疑応答時間の確保、クリッカー等を使用した授業）  
③授業時間外学習（課題シート・e-ラーニング等フィードバックを伴う）  
④グループ学習 協調学習／協同学習（PBLを取り入れた授業・ブレインストーミング）  
⑤ディスカッション／ディベート（ケーススタディ／ロールプレイング等を含む）  
⑥プレゼンテーション／課題発表（資料作成に留まらず、学生に発表を課す）  
⑦フィールドワーク（教室を離れて体験学習や社会調査等を行う）  
⑧実験・実習・実技（実験・実習・実技科目）
- 4) 既出、桂まに子「図書館司書課程におけるアクティブ・ラーニング授業の設計」における「2.1. 教育方法の改善」に詳しい。『京都女子大学図書館情報学研究紀要』第4号、2017、pp.1-2
- 5) 履修登録上は12名であったが、うち1名は3回目まで出席であったため、本稿で述べるグループワークには参加していない。
- 6) 所属学生の多い順に挙げると、文学部国文学科、史学科、英文学科、法学部法学科、発達教育学部児童学科である。
- 7) ジーン・マルゾーロ文；ウォルター・ウィック写真；糸井重里訳『ミッケ！：いつまでもあそべるかくれんぼ絵本』1992、小学館
- 8) 原文は「もういいかい？／ミッケ？」である。
- 9) 「図書館情報資源としての価値」について、次の4点から考察させた。  
①情報：用途や特性が適切、用語や用字が公平で正確、色や構成がユニバーサル、直観的なデザインで平易  
②ニーズ：図書館利用者の要求、収書計画や蔵書方針、適切な入手条件  
③質：保存できる形態・形状、耐久性のある材質、長期活用が見込める  
④メタ情報：奥付等で書誌が特定できる、帯や「はじめに」で対象者や活用法がわかりやすい
- 10) 「進め方や問題解決能力の向上」について、次の4点から振り返りをさせた。  
①時間配分：締切から逆算した行動計画、作業時間を計り、予測する、空き時間の活用・ICT活用  
②想定を超える状況・対応：異常に気づく、分担・内容の見直し、(PDCAサイクルをまわす)  
③グループワークの技能：全員で解決する気持ち（報・連・相による情報共有）、公平性の意識（役割／出欠）  
④図書館情報資源の知識：注9)の4点
- 11) 送付状は定型文を提示し、一部に空欄を設け、

そこにアピールポイントを書かせた。学生の全文2例を掲載する。下線部が学生作成部分、そのほかは教員が作成した。

実例1) 司書課程「図書館情報資源特論」を受講している〇〇 □□と申します。このたび、2017年度後期の成果として、同封の「新図書館パンフレット」が完成いたしました。昨年9月に新しくなった図書館の利用者に向けて、分かりやすく新図書館の魅力を伝えられるよう、グループで協力して作成させて頂きました。

新図書館の良いところをより多くの利用者に知って頂き、活力ある図書館を目指してこのパンフレットを見た方が「図書館に行きたい、行ってみたい」と思えるようにという思いを込めて作成した作品です。ご多忙とは存じますがどうぞ高覧くださいませ。また、至らぬ点をご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

実例2) 司書課程「図書館情報資源特論」を受講している〇〇 □□と申します。このたび、2017年度後期の成果として、同封の「錯視の世界」が完成いたしました。小学校低～中学年を対象に、見て楽しんだり、仕組みを学んだりできる科学絵本として作製しました。問題と図を先に提示して、ページをめくると答えあわせができる形にして、クイズのように楽しむことができるように工夫しました。詳しい説明と参考図書を紹介し、より多くの科学本、芸術図鑑などに触れるきっかけとなるような作品を目指しました。

ご多忙とは存じますがどうぞ高覧くださいませ。また、至らぬ点をご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。